

神戸大学人間科学系図書室蔵『別所記』をめぐって

——『別所長治記』から神大本へ——

山上登志美

(一)

天正年間におこった三木合戦のありさまは、敵対する二つの立場から描かれている。

一つは、羽柴秀吉のお伽衆の一人、大村由巳が書いた『播州御征伐之事』(「天正記」のうちの一冊)。その名が示すとおり、秀吉が織田信長の命をうけ毛利氏攻略のため出陣し、毛利氏に通じ秀吉に叛した三木別所氏を『征伐』する合戦記であり、秀吉の自己宣伝のために書かれたと思われる。

いまひとつは、別所氏譜代の武士来野弥一右衛門が書いた『別所長治記』である。来野は平山合戦で負傷しながらも生き

延び、「合戦ノ討死武勇ノ跡」を後世に伝えるために、この合戦記を書いたと巻末に記している。

『別所長治記』の伝本は数多く残っており、『別所記』或いは『三木戦記』、『三木落城記』などという異名同書もある。これらのうち、どの伝本が最も祖本に近いのか、またどれが後出本なのか明確にはされていない。

『別所長治記』系の伝本をもととして、大衆向きに大幅に増補・改訂したものが、岩崎本『別所記』と三木市立図書館蔵『播州太平記』である。この二冊の内容に大差はなく、岩崎本には「享和二年五月吉日写之」の奥書が見えることから、これ以前には成立したものと思われる。

さて本稿でとりあげる神戸大学人間科学系図書室蔵『別所

記」(以下神大本と略す)は、米野弥一右衛門が書いた「別所長治記」系に連なる一伝本である。その内容を詳細に見ていくと、他の「別所長治記」の伝本間とは比較にならない程の異文を多く含んでいる。しかし岩崎本や「播州太平記」の増補量に比べれば異文の量は少なく、また読みづらい文章や意味の通じない箇所も多い。

この神大本について、かつて石田善人氏は冒頭部分を「別所長治記」(ことわつてはおられないが、おそらく群書類従本であらう)と比較した結果、

文脈の展開は彼此すべて同巧異曲と言つて良いが、文体はかなりの相違があり、ことに後半部分は「別所記」(神大本)のみの記述になつてゐる。「別所記」は「別所長治記」の広本であるようにも受取られるが、後者を前提にして前者の広本が作られたとは必ずしも言えず、むしろ「別所記」の方が古態を存しているように思われるふしもある。「別所長治記」をはじめ「信長公記」「増補筒井家記」「陰徳太平記」「播州太平記」などの諸書には長治・友之らの辞世の歌を載せている。歌詞は諸書によつて小異があり、さらに、長治の妻・友之の妻などの辞世までも載せている。しかしこの辞世はいかにもわざとらしく、歌そのものに疑

問なしとしない。辞世の歌のない方が古態かと考えられる。しかし「別所記」に載せる長治から浅野弥兵衛に宛てた書状、秀吉から長治に宛てた返書は文章が怪しく、「別所長治記」に載せるものの方が当時の書状としては素直であると思われるから、必ずしも「別所記」の方が良本だとも言い切れない。

とし、神大本古態本説を唱えられた^③。石田氏が疑問視され、神大本古態説の根拠とされた長治等の辞世の歌については、「播州御征伐之事」や「武功夜話」^④にも見えることからしても必ずしも偽作であるとは言えず、又たとえ偽作である可能性があつたとしても、疑問をもつた後世の人が意図的に削除したとも考えられる。

私はよりくわしく三木合戦を描こうとする神大本の姿勢を素直にとつて、神大本は「別所長治記」を増補・改訂した後出本であるとしたい。以下「別所長治記」と大きく異なる部分を神大本からとりあげ、果たして神大本が後出本といえるのかどうか検討してみる。

『別所長治記』には見えない神大本独自の記事の多くは、秀吉の行動や上月城の攻防に関するものである。それらの記事のほとんどが「豊鑑」或いは「播州武名事実記」の中の「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」に見える記事である。

「豊鑑」は、秀吉の謀臣竹中半兵衛重治の子、竹中重門の著で、竹中家伝来の作者自筆本の奥書から寛永八年（一六三一年）に成立したことがわかる。

「播州武名事実記」は明和六年（一七六九年）に成立、天川友親著。播磨に関係のある武将・英傑の武勇に関する事柄を種々の戦記物、史伝などから抄録したもので、友親が編集した「播陽万宝知恵袋」に収められている。

これら二本と神大本とを比較したとき、「豊鑑」よりも「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」の方が、神大本の増補部分の内容に更に近いので、ここでは「別所長治記」と大きく異なる神大本の記事を「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」と対比させてみる。

①

神大本

天正五年羽柴秀吉ニハ播磨ヲ賜、東播既ニ合ヲ聴テ、佐用、上月猶命ヲ沮小寺官兵衛志ヲ属ス。秀吉相計、佐用、上月ヲ攻テ拔之、山中鹿之助ヲシテ上月ヲ守ラシメ、捷書ヲ馳テ告信長。

(中略)

秀吉小寺ヲ招テ陣所何レノ処カ可ナラント問ル。小寺、書写山ニシクハナシ。地形宜クシテ粮粟多シト申ス。茲ニ由テ秀吉書写山ニ營陣ヲ定ラル。

②

神大本

元春、隆景、宇喜田直家ノ兵トモニ上月ノ城ヲ囲ム。

「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」

天正五年十月信長賜、播磨、於秀吉。東播威服小寺官兵衛最属志、焉佐用氏上月氏等不従。故秀吉攻之、下上月城。一使山中鹿助守之、又攻佐用城。小寺官兵衛爲先登、而進。遂拔佐用城、斬城主兄弟。秀吉獻捷書於信長。々々大悦。

(中略)

問、小寺官兵衛曰、何処可居乎。小寺曰、書写山可也。何則僧坊惟多、粮粟不匱。入彼寺、遂遣僧徒待信長之援兵。而巴秀吉可之。乃入、書写山、而居焉。

「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」

元春、隆景、宇喜田直家ノ兵トモニ上月ノ城ヲ囲ム。

秀吉、小寺官兵衛ヲシテ山中ヲ救シム。小寺、高倉山ニ陣取テ後援ノ勢ヲナス。

元春、隆景兵ヲ二分テ、一ハ攻城、一ハ秀吉ノ手当トス。

秀吉以飛書急ヲ信長ニ告ケリケレバ、信長其嫡子秋田城介信忠ニ佐久間右衛門尉信盛、澁川左近將監一益ヲ相副、二二万許ノ人衆ヲ以テ指下サル。

①にあげた神大本の記事は「別所長治記」には見えない。神大本と「羽柴筑前守秀吉公鞆州下向之事」の内容は、表現は違うがほぼ同じといつてよいであらう。

次の②について、「別所長治記」ではこの部分は、

小早川左衛門佐隆景、吉川駿河守元春両大将二二万騎ヲ差添、備州作州ノ境ニ陣ヲ取。信長卿嫡子織田城之介、三万余騎ニテ出播州表、在々所々ニ陣取り毛利家之軍勢近

直家之兵、為_レ長治之後援上。凡_レ兵可_レ五六万_ニ即_レ團_ニ。上月城一_ニ数重。城守山中鹿助乞_ニ救_ニ千秀吉_一。々々使_レ下_ニ小寺官兵衛等_一往_レ陣_ニ干高倉山上。

元春隆景以_レ二大兵_一、故分_ニ其兵_一、為_レ二_一。其_一者攻_レ城、其_一者欲_レ与_ニ秀吉_一戰_上。秀吉馳_レ入告_ニ信長_一、々々以_レ嫡子信忠、為_レ二大将_一、以_レ佐久間右衛門尉信盛、澁川左近將監一益、副_レ之、率_ニ兵士_一一万五千、使_レ往_ニ救_レ之。

付バ欲遂一戦。

となつており、神大本は上月城の状勢を交え秀吉軍の様子も毛利軍の様子も「別所長治記」より詳しく述べている。又「別所長治記」波線部Cの部分が、神大本では波線部A「上月ノ城ヲ團ム」、「羽柴筑前守秀吉公鞆州下向之事」では波線部B「團上月城数重」となつてゐる。「播州御征伐之事」ではこの部分は「陣張備備作之境」となつており、「別所長治記」は「播州御征伐之事」に換つたため、具体的な地名をあげないままになつてゐる。

当時、上月城は織田方の尼子勝久が守つており、三木城を囲む秀吉勢の背後を威嚇するため毛利勢は上月城を攻囲した。備前播磨美作三ヶ国の境目にあつた上月城は、信長にとつてかなり重要な意味を持つ城であつたらしく、大雨のため中止となつたが、一時は家臣の諫止をふりきつて自ら上月城救援に向かうとしてゐる。

神大本では神吉落城を記した後、織田勢にやむなく放棄された上月城が陥落し、敵に降つた山中鹿之介幸盛が毛利の將に疑われ、備中の河中で殺されたことを細かに描いてゐる。

山中鹿之介の最期については様々な説があるらしく、「羽柴筑前守秀吉公鞆州下向之事」や「豊鑑」では、「遂ニ被_レ殺_レ」

とのみ記すだけで、この部分だけは神大本との関連は見出だせない。神大本が何に換って鹿之介の最期を書いたのかわからぬが、上月城についてかなり興味を持って書き足している事がわかるであろう。

③ 更に平山合戦のはじめには、上月城落城の原因について触れている。

神大本

秀吉、信忠ノ所ニ来テ上月ノ城陥テ山中斬レタルハ援兵ナキ故ナリト申セバ、

「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」

秀吉往、信忠之宅、曰、以、無、援、故、上月城陥、鹿助、授、首、是、非、二公之過謬、一歎

とあり、ここでも「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」との関連が見られるのである。

『別所長治記』では、上月城の攻防や山中鹿之介のエピソードには全く触れていない。

幡州に出陣した秀吉は、三木城を包囲すると同時に上月城の救援にも向かっているから三木の背後にあたる上月城の情勢は、三木合戦をより幅広く語るには不可欠な要素だといえるであろう。

『別所長治記』の著者米野弥一右衛門は、別所氏譜代の武士とはいえども、別所氏の中で重い立場を占めていた武士ではなかつたようである。彼は三木合戦のみの「討死武勇ノ跡」を見出し、それを伝える努力はしたが、もっと広い視野で合戦を見渡すことはできず、「播州御征伐之事」には見えない上月城の様子を書き加える事ができなかったのである。上月城の話は神大本の著者が、「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」か或いは同書が参考にした資料をもとにして「別所長治記」に書き入れたものであろう。

④ 次に紹介する事例は、①にあげたものと同じく秀吉勢に関する増補である。

神大本

始信忠播州ニ趣ノ時信長モ繼テ兵ヲ発セント欲ス。同輩秀吉ノ殊能アルヲ猜ミ、武名ヲ成ヲ妬テ信長ヲトム。秀吉温含トモ甲斐ナシ。秀吉独毛利ノ兵ト相持ス。

一日毛利方ノ卒出テ株ヲ刈処ヲ秀吉撃テ殺之。毛利方多兵ヲ

「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」

初信忠出京ノ時信長亦欲繼發、而家臣悉猜秀吉之武名、抑遏信長之発洛、亦使秀吉退兵、秀吉不得如之何。

一日毛利兵出野伏、使殺刈馬、者、秀吉兵殺

発シテ追之。秀吉ノ兵尾藤戸田等共ニ戰テ被創。富田ハ立処ニ關歿ス。秀吉其危所ニ中村支ヲ揮テ勇懸リ、敵ヲ衝立ル。其勇力拔群也。

竹中半兵衛重治見之テ兩陣ノ間ニ乘入テ士卒ヲ引纏テ退ケルニ

⑤

神大本

カ、ル処ニ中村孫平次ガ居城足本ニアレバ、イザ踏破テ捨ントテ、閉ンテ攻之。秀吉、山ヨリ見下シ兵ヲ出シテ先中村ガ急ヲ救。賀相治定等中村ヲ惜テ直ニ秀吉ニ向フ。

⑥

神大本

天正七年ノ春、長治試ニ秀吉ノ一ノ附城ヲ攻。戌兵古田吉左衛門、神子田半左衛門、中西弥

野伏、毛利兵大出而戰。秀吉兵尾藤氏戸田氏先登被創。中村氏能戰。富田氏戰死。秀吉軍殆。危。

竹中半兵衛重治見之指兵士而退。

羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事

山城守賀相小八郎治定爲之將一進攻。中村孫平次居城。秀吉率兵援之。

賀相治定等乘中村而欲破。秀吉之陣。

羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事

同七年春長治出兵攻秀吉之一子城。古田吉左衛門神子田半左衛門中西弥五作所。

五作等防戰テ、古田ハ矢ニ中テ死。長治ノ兵モ少々討ケレバ、軍ハ先是マテ也トテ、三木ノ城ニ引返ス。

三月秀吉嘗テ三木ノ城邊ニ移シテ

兵勢甚盛ナレバ、城中大ニ憂之。信忠此春又大軍ヲ師テ下ラレケルガ四月ニ至テ掃洛セラレ。

秀吉ノ策士竹中半兵衛重治、病ニ嬰テ日々ニ篤シ。皆諫テ上京シテ療養セシメントス重治云、

武夫ニ生レタル者ノ陣中ニ死スルハ素ヨリ期セシ所ナリ。只刀ト病トノ弁ノミ。何ゾ上京セントテ、六月遂ニ陣中ニ死ス。時

三三十六歳。秀吉其死ヲ悼其才ヲ惜ム。

守也。三人防長治之兵。古田吉左衛門中、筋而短長治兵亦多。死傷。而掃洛。

三月信忠率大兵。又到播磨。移秀吉嘗於三木城下近迫。城中不克拒馬。

四月信忠掃洛。

秀吉之謀臣竹中半兵衛重治。嬰病衆医療之。而無効。將上京而養。病難有微驗。難得大効。重治謂死二千軍者。武矢之望也。即掃播磨平山。

六月遂卒。年僅三十六。秀吉悼惜焉。

「別所長治記」にはない神大本独自の記事が、「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」の記事に酷似していることがよくわかるであらう。岩崎本や「播州太平記」のように大衆受けする秀吉像の大幅な増補とまではいかないが神大本の著者が三木合戦における秀吉勢の動静を積極的にとり込もうとしていることがわか

る。

⑤は平山合戦の戦闘場面から抜き出したものである。平山合戦の年月日は、天正六年十月二十二日とすべきであるのに、なぜか「別所長治記」の諸本はすべて天正七年二月六日とし、「陰徳太平記」は天正七年二月十一日としている。神大本、「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」では「十月」、「豊鑑」は「十月末つかた」としている。神大本は「別所長治記」の日付の誤りに気付き訂正したのであろう。

⑥にあげた竹中半兵衛重治についての記事は、「別所長治記」伝本中、以前三木市立図書館に所蔵されていたらしい「別所記」^①残缺本のみが、竹中半兵衛が陣中に病死したことを載せている。

此時秀吉侍大将武中半兵衛、軍半バニ病氣ニテ為療治上洛ス。然ドモ大病難治ノ間連モ死スル身ナラバ、京都ニテ夫死センヨリハト、平山ノ城ニ婦テ終ニ死ニケリ。秀吉ニモ感ジ被思召、則秀吉引導シテ葬平山之麓平井村塚ヲツカセ今ニ印シアリ。(「別所記」残缺本)

この記述だけで、神大本と「別所記」残缺本の関連を言うのは無理であろう。

はじめに触れたように、神大本には「別所長治記」等に載せ

る長治らの辞世の和歌がない。「豊鑑」・「羽柴筑前守秀吉公幡州下向之事」も辞世を伝えないことからしても、神大本が意図的に辞世を削除したと考えられるのである。

(三)

神大本には武士のあり方を描こうとする姿勢が身受けられる。以下、例をあげてみよう。

別所氏に味方した神吉民部の橋籠る神吉城をめぐる攻防は、神大本だけでなくすべての「別所記」諸伝本の中でも最も読みごたえのある合戦場面のうちの一つであろう。「平家物語」における橋合戦を念頭において書かれたと思われる梶原道庵の活躍の後、神大本では三木からの援兵が「美誉ヲ道庵ニセバ、三木ニ婦テ人ニモノ云フベキヤ。名ト命ト何レカ惜キ」と、橋桁に立並んで戦う。しかし三木勢の奮戦も空しく城主神吉民部は、叔父神吉藤太夫の裏切りによってあえなく首を討たれてしまう。藤太夫について神大本は、

其親ヲ云ヘバ甥也。其義ヲ云ヘバ君也。斬之テ命ヲ継ント思ヘル藤大夫方所為城兵ハ論ズルニ不及。信忠、秀吉モ心中ニハ悪之ナガラ敵ヲ米格セシメン為ナレバ先是ヲ捨置

ヌル。有志ノ士語ラバ口ヲ漱聞バ耳ヲ洗フベシ。

と、その不忠を非難する。「為藤大夫甥也。惣領也。前代未聞ノ事也。」とだけ記す「別所長治記」に比べれば、武士のあるまじき姿をさらした藤太夫をいかに神大本は憎んでいたかがわかる。

また梶原道庵が幼い頃、親の敵を討った手柄について神大本と「別所長治記」は次のように記している。

神大本

抑此道庵ハ幼弱ノ時備前國ノ住人萩原与一ト云モノニ其父ヲ殺レタリ。生年十三ニナリテ讎ヲ報ント思立ケルヲ其母、萩原ハ聞ル勇力ノ士也。道庵ハイマダ童子也。仕損ズルコトモヤアラント思ヒセメテ十六七歳ニナランヲマテト強テ止ケレドモ、人ノ命ハ明日ヲ不可知。萩原モシ病テ死セバ悔トモ何ノ益カアラントテ、遂ニ斬之テ本意ヲ達シタリシヨリ以來、度々ノ功名指ヲ屈スルニ余レリ。

神大本は道庵の逸話の上に、武士道的賞賛をかぶせているこ

とがわかる。

あしかけ三年にわたる籠城の末、飢餓に苦しむ三木城内の兵や雑人たちを救うため、別所長治は弟彦之進友之、叔父山城守賀相の三人の命とひきかえに兵たちの命乞いを秀吉に申し入れる。しかし賀相はこれに賛せず金兵玉砕を主張し、一人僧に上がったところを家人たちに殺されてしまう。この事件について神大本は「賀相下ヲ愛スルノ道ナク其下賀相ニ事ルノ義ナシ。君臣両ナガラ虎狼ニ均シ。」と、賀相主従を厳しく批判する。

『別所長治記』
此冬庵十三年親ノ敵備前ノ國ノ住人萩原与市トテ大力ノ功者ヲ組打ニ討取シヨリ以來

度々ノ高名不知數ヲ無反ノ勇士ト信忠モ感ラル。

一方、城内の兵たちの命と引き替えに若い命を犠牲にした別所長治の最期については、「長治死ニ臨テ士卒ヲ怒ムコトヲ不忘、士卒生ヲ貧テ長治ニ報ルコトヲ知ザランヤ」と云テ、或ハ敵ニ遇或ハ自尽シテ心々ニ死スル者モ多カリケリ。」と、賀相主従とは対照的な姿を描く。「武功夜話」によると、長治の後を追ったのは彼等の介錯をした三宅治忠のみらしく、他の家臣たちは悉く許され三木城を出ている。たとえ事実とは違っても、君臣の道に沿って、自分たちのために命を断つ主人に追いつ腹を切つて従う家臣の姿を神大本は描きだしたのであろう。以上のような「別所長治記」にはない文章を神大本は書き足し、武士道に背いた者を手厳しく非難し、武士のあるべき姿を説く姿勢が所々に見られる。これは神大本が、武士道の固定化

が定まった時期、すなわち江戸時代に入ってから成立である、
という傍証にもなるのではあるまいか。

(四)

『別所長治記』系の伝本には、すべて巻末に著者来野弥一右衛門の抜文を載せている。神大本の抜文は『別所長治記』とは違った表現をしているので、次に紹介しておこう。

神大本

右此記ヲ書者ハ別所小三郎長治ノ譜代来野弥一右衛門ト云士也。平山ノ役二度ノ迫合最中ニ軍使二行、兩陣入乱タル時、敵ノ備ニ馳入一人ヲ斬伏テ首ヲ取廻ニ、敵五六人ニ挟マレ三ヶ所ノ劊ヲ被リテ既ニ斃死スベカリシヲ我友中村康之助ト云モノ走来テ以薙刀二人ヲ斬棄、残ル者ヲ追私危急ヲ救レタレドモ重創ナレバ、平愈ノ後モ手足不具ニ成テ、鎗ヲ握馬ニ跨コトアタワ

『別所長治記』

此日記別所普代来野弥一右衛門

為軍使平山二ノ目ノ合戦半二行敵味方入乱。直ニ敵陣へ掛入一人切伏首ヲ得。残敵六七人ニ被取籠三ヶ所手負、既ニ討死スベキ所、中村（此）介ト云者助来、以長刀敵二人切伏、残ル敵ヲ追私被助傍登掃候へドモ、深手ニテ平愈ノ後歩行不叶。其後軍場へ不出三木落城ノ後作州岡山家

ズ。サレバ戰場ニ趣コトナシ。三木ノ城陥テ作州ノ片山里ニ田識ノアレバ、其便ニ就テ慮ヲ結世ヲ渡ル。別所家ノ驍將壯士其戦功武名モ知之者ナクシテ膚骨トトモニ腐果ナンコトヲ惜テ、略茲ニ記シ畢ヌ。後ノ見ン人拙キ文ヲ削テ改正サレバ、是愚カ素ヨリ所冀也。

ニ知人有テ存命也。

合戦ノ討死武勇ノ跡モ後世ニハ名ヲダニ知人アルマジキヲ嘆カシクテ、如此綴留ル者也。心アラン人ハ此日記ヲシルベニ文章ニモ載置給へ。

神大本の抜文をどうとらえるか問題の残る所であるが、神大本の「右此記ヲ書者ハ別所小三郎長治ノ譜代来野弥一右衛門ト云士也。」という書き出しは、『別所長治記』に比べて他人ごとのような感、つまり来野自身が記したものではないという印象をうけるがどうであらうか。

はじめにも述べたように、神大本は『別所長治記』の文章をより豊かな表現にしようとしたためか、難解な文章も多く、かえって堅苦しくなってしまう、同じ様に『別所長治記』から派生しながらも大衆向けに手が加えられた岩崎本や『播州太平記』に比して文学性が低いのは否めない。神大本と同じ内容を持つ伝本が現在見つかっていないのも、神大本が人々には読み辛い文章であったため、広く読み書き継がれることはなかった

からであろう。

以上神大本が岩崎本や「播州太平記」と同じく、「別所長治記」系の一伝本を増補・改訂して成立したものと仮定して、私見を述べてみた。

「羽柴筑前守秀吉公播州下向之事」は、「豊鑑」か、或いはこれに近い内容を持つ資料をもとになつたと思われるが、神大本は直接「羽柴筑前守秀吉公播州下向之事」に拠らないとしても、同書に非常に近い資料を参考にして「別所長治記」が書き漏らした秀吉勢や上月城に関する記事を増補して成つたものと結論づけられた。但し神大本と岩崎本・「播州太平記」との関連は認められない。神大本は「別所長治記」から岩崎本・「播州太平記」の延線上の中間に位置する伝本ではなく、岩崎本・「播州太平記」とは全く別個に「別所長治記」から派生した本であると考えられる。

注

① 岩崎本「別所記」は、三木市文化研究資料集第八集「岩崎本別所記」(三木市教育委員会 昭和四十六年)に翻刻され取められている。

② 「播州太平記」は、三木市文化研究資料集第六集「播州太平記」(三木市教育委員会 昭和四十四年)に翻刻され取められて

いる。

③ 「三木市史」「各説編 三 三木戦記」(兵庫県三木市編集 三木市役所発行 昭和四十五年)

④ 「武功夜話」巻八「別所一族辞世の事」

⑤ 本稿では「羽柴筑前守秀吉公播州下向之事」の引用には、「播陽万宝智恵袋」下巻(天川友親編 八木哲浩校訂 昭和六十二年 臨川書店)「卷之三十七 播州武名事実記」に取められている。「拾 羽柴筑前守秀吉公播州下向之事」を用いた。

⑥ 本稿では「別所長治記」の引用には内閣文庫蔵「三木別所軍記」(函架番号 和一六二二三)を用いた。

⑦ 本稿では「播州御征伐之事」の引用には内閣文庫蔵「別所惟任征伐記」(函架番号 和一六二二三)に取められている。「播州御征伐之事」を引用に用いた。

⑧ 「播州御征伐之事」と「別所長治記」の関わり合いについては、拙稿「別所記事 別所小三郎長治播州三木落城濫觴事」について(「甲南国文 第四十号 平成五年)の中で少し触れたことがある。おそらく「別所長治記」は「播州御征伐之事」を参考にして成立したのであろう。

⑨ 「信長公記」巻十一 天正六年五月朔日条。

⑩ 「陰徳太平記」(米原正義校注 昭和五十八年 東洋書院)の中で、米原氏は、平山合戦において別所長治の弟小八郎を討取った樋口彦助に与えた秀吉・秀長の感状(伯耆志会見郎六所収)を紹介し、感状の日付から、平山合戦を「天正六年十月二十二日」としておられる。

⑪ 筆者は三木市野田仁郎氏の好意で氏がご所蔵の残缺本のこ

ビーを拝見することができた。三木市立図書館に問い合わせたところ、現在所在不明とのことであった。残缺本は欠損のため判読できない箇所も多い。

⑫ 同注④

※ 本稿の成るに際し、閲覧、写真撮影のご許可を下さった神戸大学人間科学系図書館に篤く御礼申し上げます。